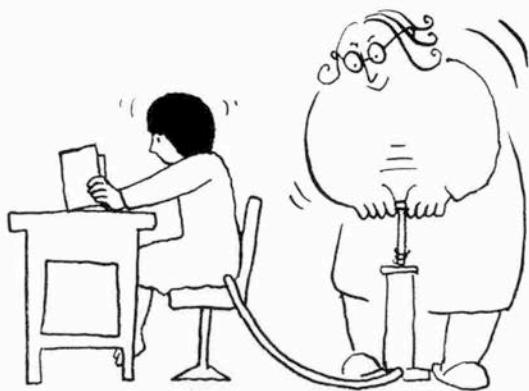
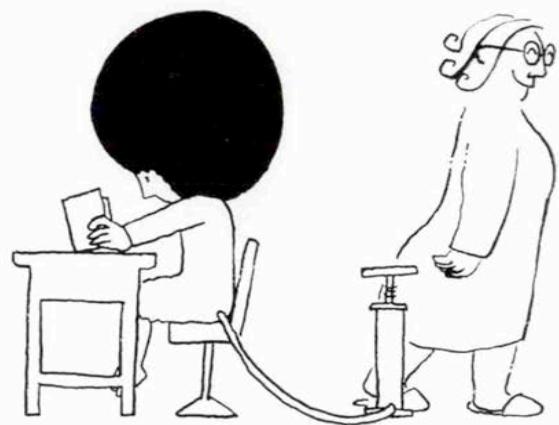
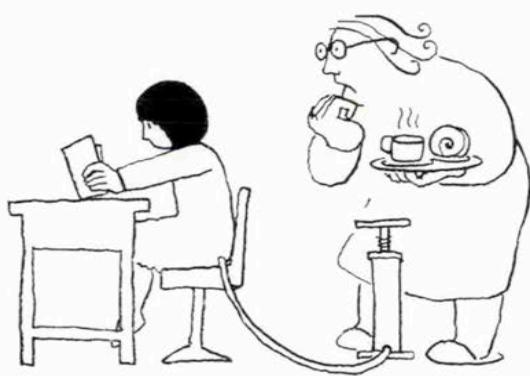


ママゴンにささげるバラード ㉑  
かわいそなうな刀

岡田 淳







&lt;IX&gt;

# 結婚つて なんだろベエ

淀川 長治／映画評論家▽

結婚したい人は映画を見てはいけない。映画の夫婦とは、たいがい苦しみの連続である。

そのあげくに「結婚とは苦しい忍耐ではなく美しい忍耐である」とぬかす。

そもそも忍耐までして結婚する必要があるうか。

一人が一人を一生愛するなんて嘘だという人もある。それがしようこに、もう赤ん坊

を作るなんてうんざりですよ、いまのおかみさんの寝姿を見ているとゾッとする。けれども…

とここでこの亭主はツバキを呑みこんで若い女とならもう一ペ

ン恋をしてもみたいなあ。

これでこの男は俗にいう（恋愛結婚）をした夫婦なのである。

結婚とはなんだろベエ。つまりは血のつながったガキを作つておかねば、という強制観念から。あるいは世間體のためか。

「アリスの恋」のアリスは三十二才になつて亭主が死んだ。十二才の男の子がひとりいる。

さてどうする。アリスはめそめしないで仕事をさがし男をさがし、ついに仕事を揃み男を

も揃んで再婚した。

「グッバイ・ガール」の女は十才の娘を持つた亭主なしの女。つまり男に逃げられてばかりいる女。その女がつぎつぎと男を揃んではまたも逃げられ「また捨てられたわね」と娘に冷静に皮肉られる女。この彼女が最後についに男を揃む。ついに結婚。

ところが「アニー・ホール」「グッバイ・ガール」の女は、男と同棲したが結婚しない。結婚を愛とは思っていない。

「結婚しない女」は一〇〇パーセント夫を信用していた女。もう年ごろの娘までいる。それがその夫に女のできていることを知つてびっくりした。夫は泣いて告白した。馬鹿な夫である。それでキッパリと別れて、

こんどはセックスだけで男を求めて、ついにその二人目の男に眞実を見る。この男も子持ちの妻に去られた画家。これでハッピーエンドと思いきや女は、もう結婚しないことにした。男は大きな一枚の絵をのこして彼女から去つていった。その大きな



枚の絵を道ばたで抱えてあましにいるところでの映画は終る。

×

結婚って、なんだろベエ。どうもあちらでは（いい）とも（悪い）とも決断をくだしてはいない。ようするに個人の問題とすることで逃げている。結婚がはつきり悪ければ（するな）であろう。良ければ（せよ）であろう。ところがそのどちらにもつかないで（キミまかせ）の映画をそれぞれに生んでいたところに結婚への自由も匂う。

結婚への自由とはわかつたようでもわからぬ言葉だが、けつきよくは（良く）するのもアナタ、（悪く）するのもアナタ…ということか。（二二）が大切なだろう。

×

ところが娘のとつぐ姿を見送った父の姿をしみじみと描いた「花嫁の父」や「ふたりだけの窓」のこれも息子が新婚の旅に出るうしろ姿を見送るその父や母の姿を見ると……夫婦の年輪の厚さがしのばれて苦労しても夫婦とはいのだなアと思えてくるのである。

×

かくてこれらのあらゆる映画から悟るところは、結婚とはどうやらやつぱり苦労をしてもやらねばならぬものとなる。それは人間への神が示された試験。その答案をちゃんと書き上げることが（夫婦）という答え。

うことは与えられた神の宿題をすっぽかすことに思えてくるのである。つまり人間として落第ということになつてゐるのである。人間は子孫を造るべくして生れてきたモノ。その人間の繁栄のために結婚はある。

結婚ないと人類めつぼう。

×

こう考えてくると結婚は恋愛だけではすまされぬ（仕事）になつてくる。

この仕事をやりとげると老いて子供に手を曳かれ孫に抱きつかれる幸せが訪れる。

ところが、このごろはいつまでたつても老けないで、

子供に手を曳かれなくなってきた。子供も独立し親も独立する。こうなると結婚はその

〔結婚しない女〕

意味を失なつて親は子供を大きくする機械みたいな存在。だから結婚なんて、ということにもなる。

×

しかし学校とは実は人間その生涯が学校みたいなものなのである。

だから人間の宿題をほつたらかすということに実に生涯が落第生みたいなサッカクでなくうしろめたさに襲われるのである。

だから結婚しない、とはいいうまい。

優等生というものは気分のいいもの。落第生とはみつともないもの。

結婚で、それなんだろうか。



# 女体自然

細川 董ただす  
△文とえ／哲学者△

△73△

## 天然の女

「先生！」

まあ一ぺん、だまされた思て輪島の女抱きに来てみて  
下さいよ。ようしおまつせ。九月か二月来てみなはれ」

「なんでその頃？」

「その時期は、輪島の男どもが北海道、東北あたりの漁

場へ出かせぎに行きまんね。

この辺では船に乗るいまんね」

「男が船に乗つたらどうなる？」

「先生、わかつてはるくせに」

「分らん」

「ようとぼけて！」

主人の留守を女房どもがもてあましりますね。

三か月ぐらい主人留守でつさかい」

「その間、女どもはどうするの？」

「旅館の女中しまんね」

「なるほど……」

旦那の留守中に妻君が浮氣するというわけ？」

「そうですがな。

そやから九月か二月がええいうてまんね。

今からやつたら九月やなあ。

大事してくれまつせ」

「七、八月はザコで一杯ですね。

しかし、海水浴客が帰つた九月から秋にかけてよろし  
で。

親切してくれまつせ」「  
「どこへ泊るの？」

「××ホテルをめざして来なはれ。  
そこで、S子かY子を指名しなはれ。

S子はみるからに好き者いう感じの大ベテラン。  
そやけど美人でつせ。ちよつと年いってたけど。

Y子はセクシーで若うて美人」

「なるほど。美人ねえ」

「そう輪島の女は、一口に美人やいうても魚でいえば、  
天然や。その点、都会の美人とはちよつと一味違いま  
つせ」

「どんな風に？」

「都会の女は養殖でんがな。

天然は養殖とは味が違いま。

ハマチでも養殖は、イワシの味してまつしやろ。えさ  
はイワシでんがな。

天然のはまちは身がコリコリしまつて問題になりまへ  
ん。

輪島は、女も天然。  
魚も天然。

静かなええまちでっせ」

「なるほど」

「先生やつたら、原稿の仕事もはかどりまつせ。それに  
絵かて、ゆっくり描けまんがな」

「そらそやろ」



「一か月ほど滞在して絵描いてはる絵描きはん多おまつせ。先生も奥さんだまして絵描きに来なはれ」

「そら「つーへんいこか?」

「××ホテルでっせ。間違わんように。それにS子とY子。」

「そないよろしか? 天然の女は?」

「そらよろし。」

「第一天然は養殖とちがつて体がしまつてまんがな」

「なるほど」

「S子もY子も海女あめのめしてまんね。それが旦那の留守にだけ旅館で働いてまんね。海女で小さい時からきたえてまつさかい、足使うてもぐりまつしやろ。胸、しり、ヒップ皆コリコリしまつてま。

第一足のつけ根がしまりまんがな。」

そら、すごおまつせ。よっぽどしつかりしてんとはじき出されま」

「なるほど?」

「それに、よがり声がよろしおまつせ。」

海にもぐつて肺活量が大きなつてまつさかい、彼女らの息の長いこと。

野生的で、情熱的で、都会の人工餌で育つたフワフワ体の女とはえらいちがいでっせ。」

そら「べん抱いてみなはれ」

養殖、天然の区別は魚だけかと思つていたら、今や、女にも養殖と天然の区別がある世の中になつたのだ。

アユも天然是身をひるがえして滝を登るという。  
天然の女も、あのとき、

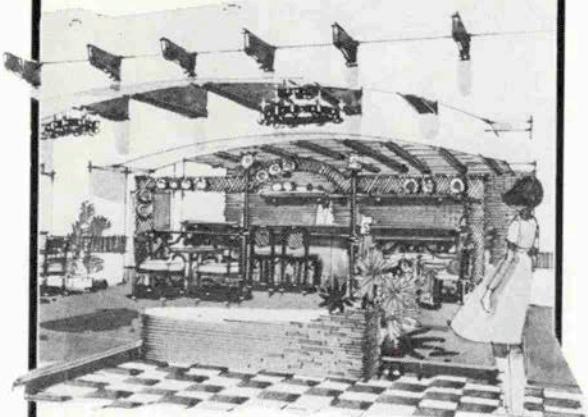
「登る、登る!」

「どうのだろうか?」

ぜひ一度、たしかめてみたいものである。



# Hat dog



## なんすい 軟水のCoffee 味、また格別。

営業時間 午前10時～翌午前2時



コーヒーhaus

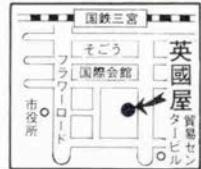
## ハットドッグ

神戸酒類販売株式会社 1F

バス停(中山手1丁目)南側角

☎ (078) 321-1689

ゴージャスなムードと手づくりの味



喫茶館  
**英國屋**

神戸市葺合区磯上通8丁目1-1

TEL (078) 251-4562

8:00A.M.～11:00P.M. 無休

# 精神分析専門クリニック オープン

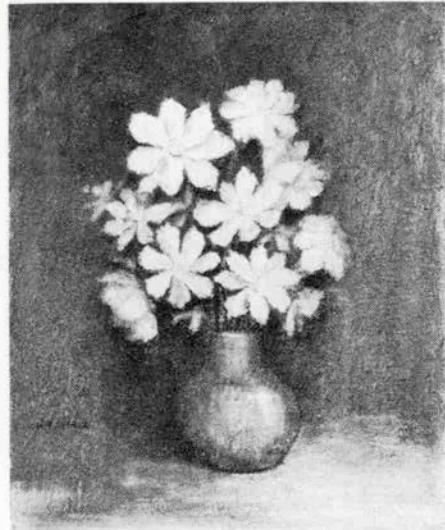


恐怖症・ヒステリー・神経症で  
お悩みの方、ご相談ください。

- 時間予約制
- 自由診療です

## 中本精神分析クリニック

医師 中本 征利  
尼崎市東園田町8丁目110-16  
(阪急園田駅東へ250米)  
TEL (06) 491-1416



画・木村文俊

## 9月のギャラリーご案内

■ 9.1 / 金→14 / 木  
木村文俊近作展

■ 9.16 / 土→30 / 木  
吉見敏治近作展

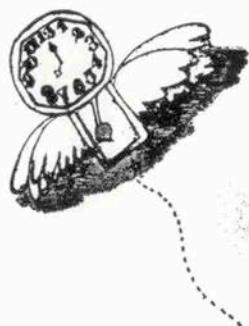
SALON & GALLERY

# 神戸時代

神戸市生田区中山手通1丁目28  
モンシャトーコトブキビル1F  
TEL 078-242-3567

日・祝休み TEATIME AM11→PM5  
DRINKTIME PM6→AM0

● 北野坂のほとりにある小さなサロン神戸時代。このサロンから新しい時代の波を



★元町通りの夏は

HOT & COOL

熱い街もとまち。8月8日

サンバチーム35名が元町本通りに練り込んできた。アーランド・コインブラ、デ・フィゲレードさんを団長にミスカーニバル、サンバ歌手ローズ・メリヤーさんなどスター揃いの一挙は、ブルジ移民70周年を記念してこれがサンバの元町団である。元町通りを踊りながら行進する迫力あ



物客も巻きこんでビバ・ビバサンバ! 夏の暑さも顔負けの熱い元町通りだった涼しい街もとまち。お次は冷んやり氷の話題。8月5日午後、大丸前から元町3丁目にかけて大きな氷塊



これがパラエティショップペニーのスタッフです

ト、パンタロン、ジャケツが素材。同じ素材で可愛い色(8色)のスニーカもあります。「男の中の男」のコート、あるいは野性を感じる小物がいっぱい。一度のぞいてみて下さい。

★レストラント「鳴門」は海の幸がいっぱい



見るは涼し作るは暑し

が道の真中、いたる所に出

現。おやおやと見ている間

に

ニューポートホテル、オリエンタルホテルなどはじめ阪神間のホテルのコックの回転レストラン「鳴門」では新鮮な海の幸いっぱいの秋を幕開き。小海老とバイアのカクテル、ステーキ、海の幸盛り合わせグリル

(車海老・鮑・鰐蟹の爪肉・鮭・貝柱) 若布のサラダ、パン、コーヒーのコースで

6000円です。9月30日迄。



海の幸いいっぱい「鳴門」の門」のディナーディナ

国際会館1Fのバラエティショッピングペニーがオープン。コ

ト、パンタロン、ジャケツ

が素材。同じ素材で可愛い

色(8色)のスニーカもあ

ります。「男の中の男」のコ

ート、パンタロン、ジャケツ

が素材。同じ素材で可愛い

色(8色)のスニーカもあ







# 神戸文学賞作品募集

小社は昭和五十一年創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動のいっそうの発展のために微力を尽したいと願っております。第一回神戸文学賞は田靡新「島之内ブルース」、同女流文学賞は小倉弘子「ベットの背景」に、また、第二回神戸文学賞は奥野忠昭「姥捨て」、吉峰正人「生活」の二作品（同女流文学賞は該当作なし）と決まりました。

ここに第三回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第であります。

## △募集要領△

- 一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、いずれも小説で、共に西日本在住者に限ります。
  - 一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。
  - 一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。
  - 一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題（創作主旨）をつけて下さい。
  - 一、締切りは九月一日（当日消印有効）
  - 一、電話〇七八一三三一一二四六
  - ☆なお、選考は本誌が依頼した選考委員によつて行います。
- 一、入選発表は本誌昭和五十四年新年号誌上。同号より作品を掲載します。
  - 一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。
  - 一、入選作品の著作権は本誌に属します。
  - 一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。
  - 一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一一三の一 大神ビル七階 月刊神戸つ子「神戸文学賞係」まで。

# 姥捨て

△最終回▽

奥野忠昭  
え・題字 犬童徹

「ほつておいてくれていい」

「ベッドの中から母が言った。」

「だいたい、かたづけておくよ」

「それより、ここ、ちょっとみてくれへんか」

「母が言つた。ぼくはそれを無視して家具類をかたづけた。母が嫁入りのとき持つてきた古いタンスをかたづけた。まんなかの箱が重いので涼子を呼んだ。

「いいわね、やっぱり古いものは」

涼子が言つた。これが今までの涼子の言葉で母をいちばん喜こぼしたことばだった。

「当時、いちばんいい値だったんです」

ベッドの中から母は叫んだ。

「そうでしようね」

母にも若いときがあつたのだ。これを買ったときの晴

れがましい気分を思つた。きっと未来に大きな可能性を見ていたらう。こんな老いの姿を想像もしなかつただろ。ぼくもすでに人生の折り返しに近づいていた。だのにまだどこかで未来の可能性を信じている。もつとちがつた人生が開けるのではないか。母の寝姿がそれをあざ笑う。おまえもわたしのようになるだけさ。

「わたしにはタンスなんてものはないわな。やっぱり嫁さんになるにはタンスなんているんやろか」

「いらない、いらない、ないほうがすつきりしていい」

「タンスも持つてこん嫁さんもらつてとおかあさん思つてんでしようね」

涼子は耳元で言つた。

「タンスなんて大嫌いさ」

「ほくの声は大きかった。母に聞こえただろう。

「いつみてくれるんやいね」

母が言つた。ぼくはベッドのそばへ行つた。母はブラウスのえりを開いている。中から乳房が覗いている。皺もなくみずみずしい。女は軀のあらゆるところが萎えても、乳房だけは生々しい。乳房の間に助骨が見え、そこが鼓動している。

「少し速いな」

母は緊張した顔をゆるめ、ふつと息を吐く。

「手を置いてみてみ」

ぼくは手を動かさない。前にもこれと同じ光景が何度かあつた。心臓が止まりそうや、止まりそうやねと母が叫び、ぼくがあわてて手を置いたことがあつた。粘っこい膚ざわり、その奥から流れてくる熱さを今でも覚えている。あれはよくなかった。その後、すべてうまくいかなかつた。母の呪いのようなものだ。

涼子がそばへきて、ぼくがどうするのかじつと監視していた。

「ちょっと見てやってくれないか」

涼子が手を伸ばすとすると、母はそれをほねのけた。

「親の脈も見られんのかね」

「見なくてもわかるさ」

母は寝がえりをうち、ぼくから顔をそむけた。はあは

あと苦しそうな息を吐いた。

「お医者さん呼びましょうか」

「いいえ、このままじつとしてたら直ります」

「たいしたことないさ」

「大丈夫やろうか」

「大丈夫、大丈夫」

涼子が心配したので、母は少し落ちついた。涼子は肩

を落し、目の移動をやめ、下をむいたままになる。

「あなた、今晚、泊つてあげたら」

ぼくを覗き込み、表情を探る。ぼくは返事せず、台所

のテーブルに坐った。

「お風呂わいてるわ」

涼子は心配したので、母は少し落ちついた。涼子は肩

を落し、目の移動をやめ、下をむいたままになる。

「あなた、今晚、泊つてあげたら」

ぼくを覗き込み、表情を探る。ぼくは返事せず、台所

のテーブルに坐った。

「孝、入れ」

「いっしょに入ろうか」

涼子がさきに上着をぬぐと息子も素直に後に続いた。

「けがしたところ、注意せんといかんよ」

母が言つた。

「ええ、わかつてます」

涼子が答えた。ふたりは風呂に入った。しばらくして

笑い声が聞こえた。とくに息子の笑い声は陽気だ。風呂

の中でふざけあつてゐる気配がうかがえる。涼子も息子に

ひどく氣を使つてんだなと思う。母はその声を耳を澄ま

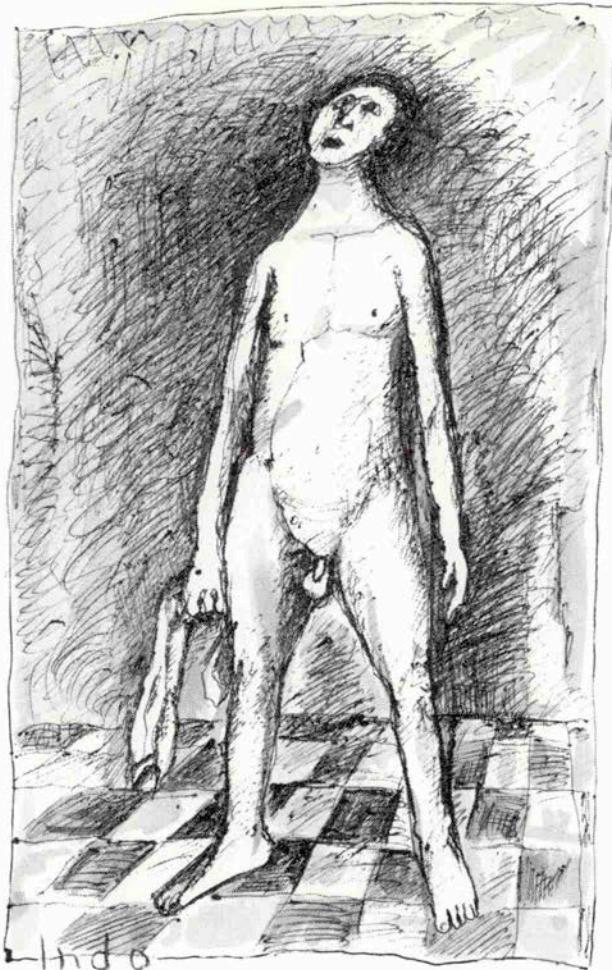
して聞いている。

「ママー、ママー」

息子は笑いながら何度も言つてゐる。

「おばちゃんでいいのに」

母が言う。しばらく笑い声が続いたのに、それが突



然、泣き声に変った。母はベッドから身を起こし、風呂の方を睨みつけた。眼が藍色に見える。

「なにしたのかね」

「ふざけてたんだろう。きっと」

「あの人、ちょっとおかしいのどちらがう」

「なにを言うんだ」

「ぼくは声を荒げた。」

「ヒステリーなんだよ、きっと。アル中の気狂いかも」

「聞こえるじゃないか」

「大丈夫かい、あんな人に孝をあげて」

「ぼくのやることにけちをつけないでほしいな」

息子はまだ泣き続いている。涼子は何も言わない。はやく泣きやましてもらいたいのだ。でないと母はまた何を言うかわからない。ぼくが風呂場へ顔を入れると、息子は眼を擦っていた。涼子は気持ちよさそうに湯ぶねにつかっている。乳房がゆれ、乳首が花びらのようだ。

「どうしたんだい」

「継子いじめしてると思ったでしよう」

「そうさ、驚くじやない」

「口と眼に水が入ったのよね」

息子が頷く。

「ね、ね、継子いじめってなに」

「そうね、ママみたいな人が、あなたみたいな子をいじめること」

「どんなことして」

「わかんないな」

「ママもするの」

「さあ、するかもね」

「ほんと、ほんと」

「するぞ、するぞ」

涼子はまた息子に水をかけ始める。しぶきがぼくの顔にあたる。息子は泣きながら笑う。彼も、湯どのへ手をつっ込み、涼子の顔にいちめんに湯をかける。髪の毛まで水びたしになる。

「さあ、もう出ろよ」  
涼子はそのまま外に出て、タオルで拭く。涼子は湯ぶねに浮いている自分の乳房を握る。軽く擦する。いい気持ちよと言う。子どもに聞こえるではないかと言おうとしてやめた。涼子とぼくの間に子どもを介在させたくない。

「入つてこない」

「ぼくはてれ笑いをしてとまどう。」

「ママがこわいのね」

涼子は舌を出して、顔をしがめてみせる。

「あの子、わたしのおっぱい握ったのよ」

ぼくは涼子のアパートでいつもいつしょに風呂に入つたことを思い出す。お互に水をかけあいながら、自分についているわざわざらしい垢がはがれ、幼児の膚になつていくような気になつた。ぼくたちがお互に垢をつけあうようになればもうおしまいだ。再び洋子との関係へすべり落ちていく。

ぼくは思いきつて、上着とズボンをぬいた。

「おかあさんのより大きいつて」

「よかつたね」

「よかつたわ」

ふたりは笑いあつた。息子が扉を開け、ぼくたちの笑いを覗きにきた。エッチ、エッチ、涼子が叫び、息子は笑つた。ぼくは母の気配を感じた。ベッドの中で、怒りの眼差しをこちらに放つてはいる母の臭いを嗅いだ。母は夕食を食べなかつた。頭からすっぽりふとんをかぶり、そのへりをしつかり握つていた。ぼくたちが風呂からあがつてから母は一言もしやべらなかつた。

涼子も息子もぼくも、黙々と夕食を食べた。だが、何を食べても、ほとんど同じ味だった。洋子のときと同じだ。まったく変わりがない。いつたい何がこんなふうにするのか、ぼくのどこが悪かつたのか、ぼくにはわからない。これはいたしかたのないこと、必然のできごとなのかかもしれない。

涼子も息子もどんなことを考えながら食事をしているのだろう。ぼくは時々、彼らの方を見ながら食べた。

「そうだわ。ビールを飲むの忘れてた」

涼子の顔が輝いた。挙げような手つきを少し椅子から飛びあがった。息子は彼女の変貌ぶりに驚いて、彼女の顔をまじまじと見ていた。

「やらかそう、やらかそう」

ぼくはすぐに立ちあがつて冷蔵庫からビール二本をとってきた。コップにつぐ音は爽々しかった。あらゆる猥雑なものをそこに溶かし込んでくれるような気がした。ぼくたちはコップを合わせて飲んだ。よく冷えた液が、

軀の中でも、猥雑なものを溶かしてくれた。おいしい、おいしいと連発して飲んだ。母はいつそう怒りの感情を押しつけているだろうが、ぼくは意にかいさない。

「ね、ね、ぼくにもちょうだい」

息子が言つた。

「ばか、子どもの飲むもんじやない」

息子は頬をふくらませ、曇った顔付をした。

「いいじゃない、少しごらい」

涼子は少し入れてやつた。息子はそれを飲んだ。顔をしかめ、眼を糸のように細めた。

「にがいだろ。やめておけ」

息子はこんどは自分でコップ一杯についた。

ぼくが止めようと思う瞬間、水を飲むように、全部口に流し込んでしまつた。

「おいしかった」

涼子が言つた。息子は頭をふつた。

「だめじやないか、子どものくせに」

ぼくが言つた。

「苦くつたって、飲みたいときがあるのさ」

前に涼子の言つたことを口まねした。

「そうよね、そうよね」

涼子は息子の肩をさかんにたたいた。

「ぼくだって、気をつかつてんだから」

涼子は息子は気をよくし、胸を突き出して言つた。涼子は何杯も何杯も飲んだが、ぼくは飲めなかつた。母のふとんは一度大きく動いたが、その後は微動だにしなかつた。

涼子はすぐに後かたづけを始めた。小声で歌を唱つた。でも、その歌声の裏に悲しさがあつた。足をふらつかせながらも手はすばやかつた。すぐに終つた。

「さあ、帰ろうか」

ぼくは立ちあがつた。

「あなた、ここにとまつたら」

「大丈夫だろう」

ぼくはちらつと母を見る。母は動かない。まるでそこ



に死体が置かれているようだ。

「孝ちゃんもとまつたら、おばあちゃんといっしょに寝たいでしよう」

息子は首を振った。それはなんの躊躇もない確固としたものだった。母もぼくも涼子も見ない。ただ自分を見ているようだった。

「氣をつかつたらあかん。ほんとのこと言いあおう」「ぼく、帰るよ。あそこにぼくの部屋があるもん」

母は噴然とふとんをめくり、転を起こした。立ちあがけた父の写真と碑牌が出てきた。母はそれを持ち、よろ

けの足で、黒檀のタンスの所へ行き、その上に置いた。

転が流れ、タンスにつかまつた。タンスは音をたてて震えた。転が崩れ、畳の上にうずくまつた。涼子とぼくが抱きかかえて、ベッドへ寝かした。母はえいだ。乾いた息がぼくたちに降りかかった。はだけたえりから乳房がのぞいた。乳房には艶がなく、皺が無数に走つてい

た。干し上げられた果物、棄てられた布切れ。ぼくは家のすぐそばの墓地を思った。三十とてない崩れた小さな墓石。陽に晒されぼろぼろ落ちた曼陀羅模様の表皮。農薬で枯れた褐色の雑草、苔まで枯れた早魃の地表。母の膚はその風景に似ていた。

「ね、泊つてあげたら」

涼子は消えいるように言つた。

「大丈夫さ」

ぼくが言つた。

「わたしひとりで帰るから」

「大丈夫だよ」

母が言つた。

「もう、孝を寝かす時刻だ」

「まだ眠くない」

息子は元気よくそれを否定した。

「さあ、帰ろう」

ぼくは立ちあがつた。

「大丈夫かしら」

「大丈夫さ」

たとえ、母が今晚ひとりで死んだとしてもぼくは悔やまない。死とはすべてひとりいくものだ。それはいずれぼくをも襲うだろう。そのとき、ぼくはひとりで母をつけなうだろう。

母は眼を開いている。眼球を動かさず天井を見つめている。じっと自分の中から生まれてくる感情を締め殺している。

「わたし帰るわ」

「帰ろう」

「心配しなくていいよ」

母は天井に向つて言つた。

「じや、明日きますから」

涼子が言つたが、母は何も言わなかつた。ぼくは息子の腕を掴み、扉を開いた。先に出た涼子がすでに階段を下りて、道を歩いて行くのが見えた。ぼくは息子の手を引きながら階段を下りた。音が鳴つた。途中で止まり、空を見た。月が出ていたが、それは空にできた傷に見えた。その傷に向つていく男が見えた。それはよれよれの背広を着たあの男だった。

△了△

作品「煙へ飛翔」で日教組文学賞を受賞。同名の作品集が昭和47年に「ツクシ書房より刊行されている。貫して教育の場を舞台に作品を展開して来たが、第二回神戸市文学賞受賞作品「姫捨て」で新境地を開いた。現在、大阪教育大学附属天王寺小学校で教鞭をとるかたわら、同人誌「らぐたいむ」などに作品を発表している。「姫捨て」以降の成果が期待される。

### □ 奥野忠昭／作家



□ 大童 徹／二紀会々員・神戸二紀所属

ブルーの色調で「騎士と馬」を長年テーマに描き続ける具象派の画家。昭和43年より二紀展に出品し、52年に「ランプの上にハートが」で会員推挙を受ける。現在大阪教育大学助教授で、毎年東京のぎゅらりー倉井で個展を開催。さし絵は今後が初体験で奮闘していた。神戸二紀野球チームを背負う迷彩ファーストである。東京芸大油絵科卒。熊本県出身。



夜ともなると秋らしさの感じられる季節。初秋の宵に、気心の知れた面々が、いつもの“はなせ”で会いました。はずむ話に夜が更けて行きます。

左より横田さん（安田生命神戸支社）、ふーちゃん、石川さん（田中工業株式会社専務）、ママ、田中さん（田中工業株式会社社長）、大磯さん（安田生命神戸支社）、前澤さん（安田生命神戸支社所長）のみなさんです。

# 花世

古川 和枝

神戸市生田区中山手通1丁目74  
荒神ビル6F ☎391-4116

